一方 Zoom を活用したオンライン授業を実施するには、まだ必要な準備がたくさんあった。何より、これまで教科書を使いながら 45 － 50 分間の授業をしてきた教員の多くは、画面越しに行う授業というものに、イメージをもてていない。中には、予備校の有名講師による配信動画のような授業をするものだと思っている人もいる。だが、熊本市が考えているオンライン授業は受け身ではなく、Zoom やロイロノートの双方向性を生かし、子供たちが主体的に学習課題に取り組んでいくようなものであった。震災復興を担う人材を育成するためには、「自ら考える子供」を育てる必要があると考えていたからだ。そのことを周知させるために、教育センターでは熊本市型のオンライン授業のモデル」をつくることとなった。

オンライン授業のモデルは、市内の学校の教員に協力を得ながら、試行錯誤を繰り返しつつつくり上げられていった。そうしてつくられたモデルは、概ね次のようなものであった。

まず、毎朝時間を決めて、教員と子供たちが Zoom でつながる。最初に行うのが健康観察。教員が子供たち一人ひとりの名前を呼び、顔色や表情などを見て、気になる子供がいないか確認をする。

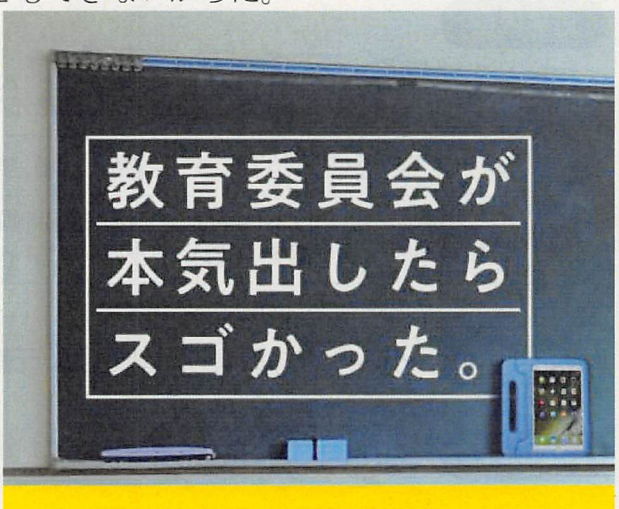
続いての授業では、最初に教員が子供たちに課題を出す。課題の出し方は、Zoom の画面共有機能を使ってもいいし、紙に書かれたものをカメラに写してもいい。課題を出した後は、いったん Zoom を切り、子供たちはロイロノートを使って課題に取り組む。課題ができた子供から「提出箱」に提出し、ほぼ全員がそろったところで再び Zoom でつながる。そして、子供たちが提出した課題を共有したり、子供たち自身が発表したりして、最後に「振り返り」を行う。

このモデルの特徴の一つは、先生が一方的に説明をするのではなく、子供たちが課題に取り組むことを柱に、授業が組み立てられている点だ。そもそも 30 分以上、先生が一方的に話すという授業は、教室の中でも厳しく、オンラインではなおのこと難しい。子供の集中力が途切れやすい上に、教員が個別に声をかけてケアすることもできないからだ。

もう一つの特徴は、最後にもう一度 Zoom でつながり、子供の意見をクラス全員で共有したり、子供自身に発表をさせたりする点である。こうした授業構成も、子供たちの学習意欲を維持する上で効果的に違いない。

一口に「オンライン授業」といっても、その形態はさまざまである。従来型の授業と同様、どちらかといえば説明中心で、教科書に沿って進めるようなものもある。今回の一斉休校時には、民間企業が配信する有料の授業動画サービスを一括契約し、子供たちが視聴できるようにした自治体もあった。学習の遅れが生じないよう、教科書を着実に進めていくことを優先すれば、むしろこのほうが理にかなっているかもしれない。

2020 佐藤明彦「教育委員会が本気を出したらスゴかった－コロナ禍に２週間でオンライン授業を実現した熊本市の軌跡」p.p.22-26 時事通信社



コロナ禍に2週間でオンライン授業を実現した
熊本市の奇跡

3年前まで「ICT後進自治体」が
4万7000人を対象にオンライン授業を実現

「平等に」ではなく「できるところからやる」

「LTE」でどこからでもネットに接続

フィルタリングは最低限
アプリや動画視聴の制限も一切なし!

佐藤明彦 著（教育ジャーナリスト）

フリー編集者
佐藤　明彦　氏